

## 特別企画「女性研究者のリーダーシップ」準備討論会

この研究会は、愛知大学研究助成金による研究プロジェクト

「女性研究者のリーダーシップ研究」の活動の一環として行われるものです。

今回は、以下のテーマについて、率直なご意見を伺い、この研究会としてのスタンスなどを議論して論理を詰めたいと考えています。興味のある方はご参加ください。

テーマ：**サイエンスコミュニケーションをめぐって**

と き：2007年2月26日（月） 午後2：00～午後4：00

ところ：愛知大学 車道校舎 会議室（当日までに確保）

### 問題提起

① 功刀由紀子(愛知大学経営学部教授)

タイトル 「サイエンスコミュニケーション」



科学技術と社会との関係を考えるとき、国際的な科学技術に対する政策転換を視野に入れる必要があります。日本でも、1990年半ばから、基礎科学を中心にした科学・技術政策の転換が行われ、いわゆるモード2（目的を明確にした科学・技術）へと移っていきました。大学でも学会でも、「社会に役立つ学問」の必要性が叫ばれ、さまざまな活動が行われる時代になりました。

現在、こうしたモード2への対応のなかで、サイエンスコミュニケーション注目されています。ところが、この活動は、多様性と多層性を持っているにもかかわらず、サイエンスコミュニケーションの研究者あるいは推進者と自負している社会科学系の研究者が、そこに気付いていない実態です。いまのところ、サイエンスカフェや理科教室的活動のように、科学好きの一般人に科学のおもしろさを伝えようといろいろな工夫がなされています。また、京大や東工大の大学院では、研究者の倫理観育成やコミュニケーション能力向上を目的とした専攻や正課科目が設置されています。ところが、現場の科学活動を担っているものから、科学の真髄をどう伝えるか、科学者として、なにを訴えたいかといった科学者サイドからの視点が薄いのではないかと思わざるを得ないこともしばしばです。科学者が目指すサイエンスコミュニケーションとは、一般の市民運動とどこが違うのか、あるいはどういう目標とすべきか、などもうすこし、単にコミュニケーション技術が中心となるのではなく、考えてみる必要があるのではないか、そういう疑問もあります。誰が、誰に対し、何を、どのような目的と効果を求めて、科学や技術に関する事柄を伝達するのか、したいのか。これに対する考察が、まだまだ不足しており、時には、その思慮の浅さが気になることも多い、というのがこの研究会で取り上げたい課題です。リスクコミュニケーション、リスクリテラシー、さらには医療でのインフォームドコンセントや遺伝子カウンセリングなど、重視する必要がある活動、あるいは注意深い活動が必要なのは、生命科学に携わる研究者側ですから、このような視点から一度問題提起して、議論を深めてみたい、というのが今回の準備研究会の目的です。少し専門的になりますが、興味のある方はどうぞお集まりくださいますように。

また、基礎科学の立場からすると、基礎的研究こそ国が支え、役立つ科学は企業がサポートするというフランスの「かつての」原則が貫かれないと、科学技術全体が枯渇し「役立つ科学」の基盤が危うくなるということで、危惧を感じている研究者も少なくありません。つい先日も、湯川生誕100年講演シンポジウムで、野依先生が講演の中でこの点を強調されました。サイエンスコミュニケーションの立場から、基礎科学の位置づけも探してみたいと思います。

愛知大学共同研究助成金「女性研究者のリーダーシップ」（代表 坂東昌子）主催